

2020（令和2）年度 第2回 知床世界自然遺産地域科学委員会

適正利用・エコツーリズムワーキンググループ

議事録

日 時：2021（令和3）年2月1日（月）10：30～12：20

場 所：小清水町多目的研修集会施設 愛ホール 多目的ホール

<議事>

1. 長期モニタリング計画の評価項目の評価について
2. 知床国立公園の利用状況調査について
3. その他

出席者名簿（敬称略）

委員

北海道大学大学院 農学研究院 准教授	愛甲 哲也	WEB
弘前大学 農学生命科学部附属 白神自然環境研究センター 教授	石川 幸男	WEB
北陸先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 教授（座長）	敷田 麻実	
北海道大学大学院 農学研究院 准教授	庄子 康	WEB
富山大学 人間発達科学部 人間環境システム学科 教授	高橋 満彦	
公益財団法人 知床自然大学院大学設立財団 業務執行理事	中川 元	
北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所 専門研究主幹	間野 勉	WEB

以上、五十音順

関係行政機関

斜里町 総務部 環境課 課長	南出 康弘	
同 自然環境係 係長	吉田 貴裕	
羅臼町 産業創生課 産業創生係 係長	藤本 茂典	
同 産業創生係 主任	田澤 道広	

事務局

林野庁 北海道森林管理局 計画保全部 計画課 課長	佐野 由輝	WEB
同 北海道森林管理局 計画保全部 計画課 自然遺産保全調整官	伊藤 俊之	WEB
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 所長	小田嶋 聡之	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 専門官	早川 悟史	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 署長	館 泰紀	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 森林技術指導官	佐々木 英樹	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 森林技術指導官	吉岡 英夫	
北海道 環境生活部 環境局 自然環境課 自然公園担当課長	小島 宏	
同 環境生活部 環境局 自然環境課 主査	澤井 尚美	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 くらし・子育て担当部長	玉川 法之	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 知床分室 兼 根室振興局 保健環境部 環境生活課 主幹	吉澤 一利	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 係長	永井 秀和	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 主事	瀬尾 樹	
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 係長	浦田 順	WEB
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 技師	小椋 智世	WEB
環境省 釧路自然環境事務所 所長	田邊 仁	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 課長	松尾 浩司	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 係員	森田 由女花	
同 釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 国立公園保護管理企画官	渡邊 雄児	
同 釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 国立公園利用企画官	湯原 敦子	
同 釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 係員	山田 秋奈	
同 釧路自然環境事務所 羅臼自然保護官事務所 自然保護官	高橋 すみれ	

運営事務局

公益財団法人 知床財団	理事長	村田 良介	
公益財団法人 知床財団	事務局長	高橋 誠司	WEB
同	企画総務部 部長	岡本 征史	
同	企画総務部 公園事業係 係長	秋葉 圭太	
同	企画総務部 公園事業係 主任	金川 晃大	
同	羅臼地区事業部 公園事業企画係 係長	坂部 皆子	
同	羅臼地区事業部 公園事業企画係 主任	江口 順子	
同	事業支援室 主任	新藤 薫	

※1. 議事録の記述において、発言者の敬称・肩書等は省略しての記載とした。

※2. 文中、WG はワーキンググループの、ML はメーリングリストの、AP は河川工作物アドバイザー会議の、それぞれ略称として使用した。

開会挨拶・資料確認 等

山田：これより 2020 年度第 2 回知床世界自然遺産地域科学委員会適正利用・エコツーリズム WG を開催する。開会にあたり釧路自然環境事務所長の田邊からご挨拶申し上げる。

田邊：新型コロナウイルスの感染状況が見通せぬ中、各位のご参集に御礼申し上げます。本日は大きく二つの議事を予定している。まず「長期モニタリング計画の評価項目の評価について」であるが、前回の協議内容を受けて、モニタリング項目の位置づけに若干変更を加えてお示しする。また、評価に関する説明も加筆した。本日はこれらの点を中心にご助言やご意見をいただきたい。次に「知床国立公園の利用状況調査について」では、利用状況調査の手法についてご協議いただきたい。新型コロナが依然として収束しないため、今後の利用を正確に見通すのが難しい状況であり、柔軟な対応が必要になってくると考えている。今後どのような情報をどういった手法で収集していったらよいかについてもご助言を賜りたい。冒頭でも申し上げた通り、新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、本日は会議時間をこれまでより短く設定しているが、委員の皆様、関係機関の皆様から忌憚のないご意見をお願いして挨拶に代えさせていただく。

山田：本日は全委員が出席している。愛甲・石川・庄子・間野の各委員は Web での参加となる。配布資料はお手元にお配りしている通り。本日の会議は公開で行われ、資料及び議事録は、後日知床データセンターのホームページで公開される。今回は Web 参加者

もいるため、発言は必ずマイクを用いること、またマスク着用のためクリアな発言をお願いする。その他、新型コロナウイルス感染防止の基本的事項にご協力を願う。以後の進行は座長が行う。

敷田：本日の参集に感謝申し上げます。議事次第に従い、本日は2項目プラスその他という内容になっている。議事1「長期モニタリング計画の評価項目の評価について」は、長らく検討いただいてきたが、ようやくまとまってきた。本日は評価内容について協議する。議事2「知床国立公園の利用状況調査について」では、現場の方が苦勞して集めたデータが有効利用されるよう、闊達な議論をお願いしたい。時間が限られているので、資料説明をする方は、資料を見ればわかること、資料に書かれていることを読み上げることはせず、どういう点について協議してもらいたいかということ念頭に置いて説明を願う。Webでご参加の委員は、私もモニターを見ているが、気づけない場合は声を出すなどの意思表示をしていただいて構わない。では、さっそく議事1の説明から始める。

議 事

1. 長期モニタリング計画の評価項目の評価について

- ・資料1 長期モニタリング計画 評価項目の評価シート案
- ・参考資料1 知床世界自然遺産地域長期モニタリング計画

……環境省・高橋が説明

敷田：今ご説明のあった内容については、既に昨年度から度重なる議論を経ており、内容については概ねご了解いただいていると思う。改めて確認したいことがあれば承る。特になければ、座長としてではなく一委員の意見として私が発言させていただく。資料1の長期モニタリング計画の評価項目VIIは、レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境の保全が大きなテーマになっている。したがって、表面中段の「総評」のコメント欄にある<注視すべき状態>の記載は、評価項目VIIに沿った視点で書いたほうがよいと考える。例えばヒグマに関する記述で、「ヒグマとの軋轢や捕殺数が増大傾向」とだけ書かれており、レクリエーション利用と自然環境保全との関係に触れていない。人為的利用によってヒグマがどうなったという書きぶりであれば、読み取れる情報がまた異なってくる。次回からでよいので、そういう書きぶりにしていただきたい。少々抽象的で申し訳ないが、一番上の項目から読み進めていくと、この<注視すべき状態>に関してもその意識で読み進めていこう。それならば、その視点を徹底した方が分かり

やすいという意見である。他に意見・質問などがなければ先に進める。資料2「知床国立公園の利用状況調査について」の説明を願う。

2. 知床国立公園の利用状況調査について

- ・資料2 知床国立公園利用状況調査の整理について
- ・参考資料2 2020年度知床国立公園利用状況調査結果(暫定版)

……環境省・高橋が説明

秋葉：調査を実際に担当させていただいている知床財団から補足する。今、環境省の高橋氏からも説明があったように、利用のモニタリングについては見直しのタイミングに来ているのではないかとということで、相談しながら提案させていただいた。現状において課題と感じているのは、調査項目が増加していることと、調査項目の内容が複雑化していることである。特定の調査項目に、観光地の、ある特定の場への入り込みに関する数の情報と、アクティビティや動態に関する情報など複数の性質の異なるデータがないまぜになっている状態である。したがって、一定の考え方に基づいて調査項目のカテゴリーを整理すべきではないかと考えている。基本的に「場」というものは変わらないので、これについてはカウンター調査を中心とした従前どおりの方法でデータを取り続けていく必要がある。アクティビティ、ツアーなどは、新たなものが生まれたり、催行形態が変化したりする。シャトルバスの運行なども制度を背景としたものなので、変化する。これらは、変わることを前提とした「アクティビティ・動態」としてカテゴライズし、新たなものが出現したら適宜追加し、その背景や経緯を合わせて記録する、という発想が必要だと考えている。

集計の仕方だが、現状の集計方針は、特定の場所への入り込み数について、できるだけ確からしさを追求するという考え方である。そのため、なんとか高い精度で推定しようとするのだが、そうすると制度や利用形態、推定方法の変化に応じて（調査項目も集計方法も）適宜変えていかねばならない。モニタリングの目的が何かということにもよるのだが、入り込みの傾向や変化量を把握することが目的であるならば、できるだけ変わらぬ方法で調査し続け、数値を並べ見る必要があるはずであるが、現状の調査方法はそうっていない。一方で、ある場所への入り込み数の情報はやはり必要で、こうした推定情報は、その時々利用環境やデータの取得状況に応じて、できるだけ確からしい方法で推定し、補足的に併記したらよいのではないかと。カテゴリーの整理と同時にモニタリングとしての調査手法の考え方という二方向からの見直しが必要ではないかといった議論をしているところである。補足は以上である。

敷田：利用状況調査についての説明と補足を終えた。これについて質問・意見を承る。

中川：動態やアクティビティといった利用形態の変化は、モニタリング項目として重要になってくるだろう。資料2の「2. 基本的な考え方」の項に「(3) 経年的な変化の把握を優先し、制度や利用形態により変化しづらい指標を用いる」とあるが、この「利用形態の変化」が非常に重要になる。特に体験型に代表される新たな利用が、より大きなインパクトを自然環境に与える、もしくは、これまでになかったようなインパクトを与える、そんな利用形態が出現するのではないか。これまで連綿とデータをとってきたわけだが、エリアと連動した利用で言えばバックカントリーの利用のような、新しい利用の形というのは出てくるだろう。それらをきちんと押さえていくことが重要だ。記述でしか記録できない定性的なものもあるだろうが、ある地域の利用面積の変化など、今はこのくらいだったものが今後どうなっていくか、定量的に把握していくことも必要だろう。

高橋（満）：質問がある。参考資料2のp.1に「連山5,848人」とあるのは、硫黄山から羅臼岳にかけての登山利用のことだと思うが、岩尾別から入山した人と羅臼温泉側からの人の合計という理解でよいか。もう一点、羅臼温泉側の入山者カウンターはどこに設置されているか。

高橋（環境省）：最初の質問については、参考資料2のp.22に詳細を掲載しており、データは岩尾別と硫黄山、それに羅臼側（のそれぞれ登山口）で得られた数値の合計である。羅臼側のカウンターは野営場を少し下ったところの曲がり角のところにある。野営場側から入山する登山者と羅臼ビジターセンター側から入山する登山者の両方をカウントできるところに位置している。

高橋（満）：かなり下の方にあるということか。それだと、少し入ったところに滝があるが、滝だけ見て帰ってくる人も数えていることになる。オーバーカウント気味であるという理解でよいか。

高橋（環境省）：そのとおりである。

敷田：行ったり来たりする人もいるだろうし、風が強ければ（風で）動いたものをカウントしてしまうなどのこともあるだろう。そういうものとして扱っていただくしかない。関連して他にご意見などあるか。

間野：資料2の「2 基本的な考え方」の「(3) 経年的な変化の把握を優先し、制度や利用形態により変化しづらい指標を用いる」というのは重要だとは思う。しかし一方で、p.3

のA3版の一覧を見ると、国立公園内にしろ遺産地域内にしろ、新たな利用形態というのは相当数生まれていると感じる。もちろん（新たな利用形態は）環境負荷を低減するとか、より安全に利用するといったことに配慮して導入されているとは思いますが、やはりそれらについてもデータをとらなくてはならない。できるだけ変化しづらい指標を用いて効率的にデータを取りたいという思いは理解するが、入り込みの数というのは非常に基本的な数字である。環境への負荷を考える際に、総量としての人の入り込み数に対して、踏圧の影響とか廃棄物の増加とか、自然環境への悪影響を把握する基本的な数値であり、省略できないのではないかと。人がどれだけ活動し、それによって自然環境がどう変化したかというデータは原点であり、一貫して収集し続けるべきだと考える。この点、愛甲委員や庄子委員、石川委員のご意見も伺いたい。

もう一点、モニタリングを通じて人為活動の影響を見るということに関しては、世界遺産の管理目標とワンセットで示していかなければならないと考えている。人が増えたから（こうなった）ということよりも、将来的に「これ以下の負荷であれば許容できる」とか「これをやるとこちらの地域の生態系の持続性が損なわれる」とか、逆に言えば、利用する人間の側にとっても「今あの場所は人が多すぎて（楽しめない）」といったように、もう一段階踏み込んだ発想が必要なのではないかと思っている。

敷田：間野委員が意見を伺いたいといった三委員から何かないか。

愛甲：質問してよろしいか。今回のこの提案に基づいた項目などの整理はいつからの実施を想定しているか。もう一点、入山カウンターの項目については一部削除するという説明だったが、入山カウンター自体を撤去し、各カウンターでの計測そのものをやめてしまうのか。それとも、カウンターの設置は継続するが、データの整理としてこの一連の利用状況調査の結果には含まれてこないという意味なのか。項目として消えてしまうとして、参照したければここを見ればよいという形で示すのかといった点について教えていただきたい。また、昨秋にはシャトルバスを試行的に運行したが、その期間だけといったような調査を我々は行った。今後もし同じようなバスの運行がされるといった場合に、同様の調査をして比較検討する必要が生じるかもしれない。これは質問ではなく、そういうことがあるかもしれないことを考慮しておくべきだという意見である。それから、資料説明の中で推計の仕方についての言及があったが、推計をどう取り扱うか、増加する一方のデータをどう管理・蓄積していくかということも考えなくてはならない。途中で推計の仕方を変えてるのであれば、元データに立ち返って推計しなおす必要が生じる場合もあるだろう。後から確認できるようなデータの管理方法も検討しておくべきだ。

敷田：間野委員のご意見は全般的な考え方についてであった。愛甲委員からは、データの取

捨選択の仕方、単発的な調査で得られたデータをどう取り扱うかという確認、それから将来にわたるデータ管理の方法であった。データの最終的な管理者を誰にするかという、これはなかなか厄介な問題である。環境省は今この場で回答できるか。できなければ、次回の会議でお答えいただくよう準備していただくことになるが。

高橋（環境省）：愛甲委員の、データの取り方が変わるのかというご質問について回答すると、基本的に今のデータ収集方法を変えるものではない。データの整理として利用状況調査に記載しないという意味で、既存の入山カウンターを撤去したり他所に移したりといったことはしない。知床五湖とカムイワッカについても、今とっているデータの表現を変えるようなイメージでいる。得られたデータをそのまま示すのか、補正を加えてから示すのかといった違いになる。最初の「いつから」という質問だが、特に異論がないようであれば次年度からでも可能と考えている。ただ、知床五湖とカムイワッカに関しては個別に部会が設定されているので、部会での協議の進捗にもよるだろう。お伝えし忘れていたが、敷田座長からは、参考資料 2 をまとめていく際の体裁について、グラフで示せるものは細かな数値は不要ではないかのご助言いただいた。

敷田：概ねお答えいただいたが、データ管理に係る方針の案については、今回は会議時間に制約もあるので、次回お示しいただくのでよいと思う。「方針の案」というと曖昧な印象を持たれるかもしれないが、誰がどのように保管・管理・蓄積していくかということである。「知床白書」や「知床データセンター」もあり、これらは一般の人も見ること・使うことができる。今後、データのオープン化は避けて通れない。我々のような専門家や関係行政だけではなく、一般の人が見るという前提で進めていただきたい。あくまで私個人の案だが、「知床白書」は見やすいように処理されたグラフなどが一般の人向けの「入口」として示されている、多少の処理を施した程度のデータ、固定した一次データは「知床データセンター」からダウンロードしていただくという体制がよいように思う。1～2 年でこの体制に移行できるだろう。今表現されている内容は、一般の人向けには、フォーマットをきれいに整えて見やすくするだけでもこと足りると思う。今年から、コメント部分を四角で囲んで目立つようにした。おそらく一般の人が最初に見たいのはこの程度で、一番上に「タイトル」、次に「コメント」、そしてグラフがあって、一番下にグラフに関する注釈があるようにしたらよい。すべてのデータが同じフォーマットでそれぞれ 1 ページに収まるように整えられていると見やすいと思う。関連してもう一点申し上げる。データは溜まっていくものなので、年々文字が小さくなる、もしくはページ数が増えていく。したがって、何年以後を表示する、あるいは過去何年分を表示するといった設定をして、全体を通じて統一しておいたらよい。基本的には世界遺産に登録された 2005 年の前から表示されていれば、登録前後の変化が追えるし、こういった会議における議論も（登録前との比較を踏まえてなされることが多いので）し

やすくなるのではないか。今後 10 年 20 年先にどうするかについても、案としてお示しいただきたい。

間野委員も言及されたが、今は基本的に人数で利用の状況を見ている。しかし、今後モニタリングの方法が高度化していくこと、例えばスマートフォンや様々なセンサーを使ったモニタリングが可能になっていくことを考えれば、利用の状態、利用の内容などもモニタリング対象になっていくと思われるので、こうした点も意識していただければと思う。現状は把握しやすいから人数を採用している。その点を関係者が合意していればよい。

中川：生データと公表するデータについて、どのような補正をするのか簡単に教えていただきたい。入山カウンターの機器にはこの程度の誤差があるので、こういう補正をしているといった、なんらか確立した式があるのか。それとも担当者が判断して補正しているのか。

高橋（環境省）：入山カウンターに関しては、例えば夜間で登山者が歩いていないであろう時間帯にカウントされたものは取り除いている。また、一定の時間内に通常では考えられない多量のカウントがなされた場合、例えば（風などで）草が動いたのをカウントしたと疑われる場合や動物がカウントされたと思われるような場合などが、入林簿を参考にするなどして排除するなどしている。カムイワッカの補正については資料 2 の p.3 の最左欄「評価根拠」の部分に記した通り、補正係数を算出しており、これを様々に掛け合わせて推定値を出している。こうした補正係数の中には、どういう根拠に基づくかが曖昧なものもある。根拠が分からぬまま当該補正係数を使い続けるよりは、カウントしたデータをそのまま使った方が（傾向としては）正確に追えるのではないかといった議論があり、それが今回の提案の背景ともなっている。

中川：カムイワッカと登山道では補正の仕方が異なるわけか。登山道は担当者の判断で細かく補正をしているということだが、それだと担当が変われば補正の考え方や採用／排除の加減も変わってしまう。将来的なことを考えると、生データをどう扱ったか、補正の方法をきちんと記録しておかないといけない。もう一点、カウンター機器も性能が向上しているだろうが、それも考え併せて生データだとしてもどういう機器や補正の式を用いたかに関しても、全て記録・保存していくことが肝要だ。

敷田：現場も苦労・努力をしていると思うが、さらによろしく願う。

高橋（満）：参考資料 2 の p.52～53 に「サケマス釣り利用者数」が示されている。サケマス釣りに関連して、ヒグマと釣り人との軋轢云々といった課題があると承知している。質

問だが、ここに示された「釣り利用者数」とは、ウトロ地区・羅臼地区いずれも渡船での釣りが。もしそうなら、陸（河口）での釣りによる様々な問題は、ここからは読み取れないという理解でよいか。

南出：斜里町は、町の水産担当部署から報告されたデータなので、正確なところは恐縮ながら把握していない。

敷田：単純に読み取れば、これはライセンス発行数ということだと思うが、確認の上、後日 ML で共有を願う。

南出：承知した。

敷田：p.53 の羅臼側についてはいかがか。

藤本：羅臼側のデータは、各渡し船の事業者から提供された、エリアごとの渡船による釣りの客の数である。

石川：先ほどの間野委員の発言に関連してコメントさせていただく。資料 2 は、モニタリングした結果をどう整理するかという技術的な提案だと理解している。資料説明でも、一部を詳細に見ていくと、別な一部は少し詳細さが落ちるといったような、関係性に関することに触れていた。対するに間野委員は、モニタリングした結果、自然の質と利用の量の関係を全体としてどのように把握するかということをご指摘になった。全体としての質がどうなっているか、全体の方向性を見ていくことが重要だということで、私も全面的に同意する。

次に、整理したほうがよいと思う点について述べる。資料 2 のタイトルが「知床国立公園利用状況調査の整理について」となっている点だ。そもそも我々が託されているこの会議は「知床世界自然遺産地域」について論じる場なのではないのか。私が理解できていないかもしれないが、全体としてよい方向にいつているのか否かという議論は、「世界自然遺産」という枠組み内でなされるべきで、さらに申し上げれば、我々が今この WG で議論するのではなく、もう一段階包括的な議論をする場で手掛けるべきなのではないか。個別の議論と包括的な、もしくは総括に向けた全体に関係してくる議論、国立公園としての利用に係る議論と世界自然遺産という枠組みでの議論、何をどの枠組みで協議し判断するのかといったことが、きちんと整理されるべきなのではないか。

敷田：石川委員から資料のタイトルも含めて、何をどの会議で議論や整理をするのか、枠組

みをはっきりさせた方がよいというご意見だ。座長の意見として申し上げますと、長期モニタリングが今まさにその体制になっている。つまり、今回の改定から、どれだけ使っているかと、それがどういう環境に影響を及ぼしているのか、の二つに加えて、どれだけ管理をやっているかという三者の関係で見ていくということにした。この考え方に従えば、今回の利用状況調査というのは利用だけを見ていく内容に限定をすればよい。自然環境については、他のWGやAPでも調査をしているわけだが、その一方で管理に関しては、長期モニタリングの関係でフォーマット（評価シート）も出来上がり、各位の協力のもと進めている。この三者を見ながら検討していくことが妥当だと考える。関連してご意見・コメント等あれば承る。

秋葉：中川・間野両委員のご意見に関連してコメントさせていただく。モニタリングの目的の一つに、利用が環境に与える影響を知ることが挙げられる。ただ、利用状況調査を行うことでその絶対数なりボリュームなりを知りたいという立場と、変化量のトレンド（傾向）を知りたいという二つがあると認識している。ただ、野生動物の調査同様、絶対数を知るとするのは技術的に非常に難しい。絶対数（ボリューム）の把握については色々な手法が考えられるが、真の値がわからない以上、手法を変えればそれ以前の数字も変わってしまう可能性がある。したがって、まずは確実な方法で傾向や変化量を把握することを重視し、絶対数については補足的に用いることが得策ではないかと考えるがいかがか。大きくその二つの考え方に整理できると思うので、モニタリングする立場としては、絶対数（ボリューム）と傾向（トレンド）と、どちらを優先・先行させるかといった点についてご意見を頂戴したい。

愛甲：間野・石川両委員の発言に関連してコメントさせていただく。利用の量それ自体が直接自然環境への影響量に反映されるわけではないというのは、先ほどの座長の整理の通りだろう。資料3-2に聞き取り調査の結果がまとめられている。利用形態の変化とフィールドに与える影響に関して、関係者が気づいたことも（聞き取りに基づいて）記されている。利用者数の変化、入り込み数の増減、各利用の場における利用の仕方の変化、そうしたことが自然環境に影響を与えたか否かについては、聞き取りなどから得られた情報を通じて見ていくことになるのだと思う。ただ、その件で少々気になる点がある。この利用状況調査の結果は毎年更新され、モニタリングも毎年実施して結果が報告されるわけだが、その両者を組み合わせた評価を行うのは長期モニタリングを評価する時点ということになる。先ほど間野・石川両委員のご意見は、利用の影響が（環境に）どう表れてくるかというのを見るのは、長期モニタリングを実施するときだけでよいのか、ということ指しておいでなのではないか。評価のタイミングについては何か（手を）考えなくてよいのか、という投げかけではないかと感じた。

敷田：得られたデータについて、いつどこで議論をするのか、長期モニタリングの評価時点だと間隔が開きすぎるのではないかとのご指摘と理解した。標準化されたデータが手元にあるのであれば、まさに専門家が揃うこの WG が議論すべき場であり、ここでの議論の結果を科学委で説明し、適正利用・エコツーリズム WG としての見解についてさらに専門家の意見を聞くといった手順だと考える。事務局で何か異なるお考えがあれば伺う。ないのであれば、必要な資料が示された上で、この WG の場で専門家の各位を中心としつつ、現場の関係者の方々と今のような議論をするという整理でよろしいか。頻度としては一年に一度、毎年とする。議題が多い中、また増えるのかとお思われるかもしれないが、本来そうした議論をすることが専門家の責務だと思う。より多くの時間を割いてもよいのではないかと考える。

中川：先ほどの秋葉氏の質問に、私の考えということで述べさせていただく。傾向と絶対数、どちらを優先させるかと言われれば、やはりモニタリング調査は傾向を押さえることが重要であり、優先されると考える。それがきちんと押さえられていれば、たとえ絶対量が明確になっていないものでも、将来的にはその当時にさかのぼって正確な数値が導き出せるということもあろう。そういう意味からも、調査方法は変えないことだ。もう一点、先ほども触れたが、数値の補正をしているなら、どのように補正したか、補正前の数値とともに記録・保存しておくことが肝要だ。そうすれば、新たな知見が加わったときに見直したり、改めて補正しなおしたりできる。

間野：秋葉氏の問いかけに対し、私からも、傾向を見ること、絶対数はわからなくても相対的な指標の変化が明確であることが重要だとお答えする。ここで重要なのは、指標が標準化されていて比較可能なことである。調査方法を変えておいて、増えたとか減ったとか言っても意味がない。もし調査方法を変えざるを得ない場合でも、いつどこをどう変えたのか後から確認できるようにしておくことが重要で、それさえあれば、日を遡及して補正しなおすことが可能になる。先ほど愛甲委員も指摘した通り、人の活動が自然環境に与える影響との因果関係は、簡単には明らかにならない。データの収集には大変な苦勞が伴うことは想像に難くないので、新しい技術などを使うことで省力化できるなら、それは導入すればよい。しかし、ある指標を設定して将来それをどのように活用していくのかといった確固たる哲学のようなものを、我々科学委の専門家のみならず、運用する事務局も持つこと、それを持ち続けることが重要である。

敷田：重要なお指摘をいただいた。中川・間野両委員とも、傾向を重視すべきであるというご意見だ。これはもちろん、これまでの絶対量に係るデータの蓄積を無視するわけではない。事務局に伺うが、この調査結果についての議論は毎年度第 2 回目の WG で行うという認識でよいか。年度を超すとか、年度内 1 回しか WG を開催しないというよう

なことはないと思っているが、もしその認識でよければ、この利用状況調査結果と各委員がお持ちの自然環境に関連する影響のデータ、他の WG や AP のデータ、そしてこの利用状況調査を含む管理に向けた努力量のデータ、これらを毎年度第 2 回目の WG における固定の議題として組み込んではいかがか。資料作成の労が増すというご懸念はあるが、あるものだけお示しいただき、この WG で委員各位に議論していただくことを固定するというごことはいかがか。

高橋（環境省）：議事 3「その他」の中で、モニタリング項目 No.19 および No.20 の 2020 年度の調査結果を報告するつもりでいたので、同様に次年度以降もお示しすることは可能だ。ただ、他の WG や AP がまとめるデータについては、それらの開催日との兼ね合いもあるだろうから、今この WG 事務局として確約したり保証したりということは難しいと考える。

敷田：他の WG 等のデータと言ったのは、兼務している委員もいるので、既知の情報を共有できればよい、敢えて紙媒体の資料を用意いただくともよいというイメージで申し上げた。限られた時間ではあるが、そういう場を一定して設け、利用のインパクトと自然環境の変化、それに関係各位の管理努力、この 3 要因のバランスを見るというのが本提案の核心である。特に異論がなければ、2021 年度の第 2 回目の WG から定例の議題としたい。事務局・両町に追加の資料は発生しないはずだ。改めて確認する。異論はないか。異論なしと判断し、毎年第 2 回目の WG の議題に当該モニタリング結果を用いた利用状況・管理状況の議論を定例の議題とする。

一点、先ほど石川委員からご指摘のあった「資料 2 のタイトルが知床国立公園になっている」という点だが、これは予算の関係ではないかと推測しているが、どうか。

渡邊：その通りである。

敷田：「知床白書」の第 3 章の表題も「知床世界自然遺産地域の管理状況」となっているので、ご安心いただきたい。

中川：ちょうど「知床白書」の話題になったので、触れておきたい。要望だが、事前の資料送付の際、「知床白書」もつけていただくと助かる。「知床データセンター」のサイトに行けばよいのかもしれないが、ご検討いただけないか。

敷田：事務局は検討願う。ここで 5 分の休憩とする。

< 休憩 >

敷田：再開する。議事 3「その他」である。資料説明を願う。

3. その他

- ・資料 3-1 モニタリング項目 No.19 2020 年度調査結果
- ・資料 3-2 モニタリング項目 No.20 2020 年度調査結果について

…環境省・高橋が説明

敷田：ただいまの資料説明に意見・質問などあれば承る。関連情報などあれば、委員あるいは事務局から補足していただきたい。なければ先に進むが、この後、昼休みを挟んで午後にも会議があるので、昼休みなどにお気づきのことがあれば共有願う。この調査は現場の方の負担を増やしているが、利用の状況を WG の委員各位・行政機関各位と共有しながら議論できるという点で非常に大きな進展ととらえている。今後もご尽力願う。では、最後に参考資料 4 についてである。

- ・参考資料 4 自然公園法の施行状況等を踏まえた今後講ずべき必要な措置について

(中央環境審議会答申(案)概要)

……環境省・松尾が説明

敷田：本体は 30 ページほどにも及ぶが、わかりやすくコンパクトに説明をしていただいた。ネット上に本文が掲載されている。非常に細かく書かれているが、これまで実現困難だったことが今後可能になるかもしれないと思わせてくれる内容もある。この WG でも、国立公園の今後のあり方を意識した議論を進めていきたいので、ぜひダウンロードして一読を願う。特にご意見などがなければ終了としたいが、全体を通して何かあるか。一点、事務局に作成を依頼しながら、参考資料 5 に触れるのを失念した。前回の WG の議事録要点版で、本来は冒頭で振り返りに使用するつもりだった。ただ、本日の議事において齟齬はないと思う。特に、長期モニタリング計画について今回確定させるべきは確定できたと思うので、各位の議事進行と関連な協議に御礼を申し上げて、2020 年度第 2 回適正利用・エコツーリズム WG を閉会する。

以上